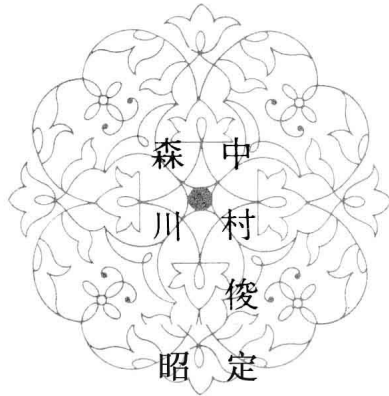


古典俳文学大系 1

貞門俳諧集 一



校注

集英社

古典俳文学大系 1

一集諸俳門真

昭和45年11月10日 初版発行 ©

定価三八〇〇円

校注者 中村俊昭

編集 株式会社創美社

東京都千代田区神田神保町
三ノ一七ノ三都ビル

発行者 陶山巖

印刷所 大日本印刷株式会社
大文堂印刷株式会社

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇
電話東京二六五局六一一三番
振替東京一五六五三番
郵便番号一〇一三番

落丁本・乱丁本は本社にてお取替えいたします

目次

解説	三
凡例	一四
守武千句	一九
犬筑波集	四四
犬子集	六三
塵塚俳諧集	一五三
新增犬筑波集	一九四
正章千句	二五五
崑山集	二八三
紅梅千句	四六〇
源氏鬢鏡	四八四
貞徳俳諧記	五〇四
俳諧独吟集	五五五

あせいじちろう
清十郎ついせん
入りやつこはいかい
はいかいもちづか
俳諧塵塚
五九
五六

解説

犬筑波集・守武千句前後

中世を通じて、連歌は本来の滑稽性を捨てて和歌的世界を志向し、文芸の世界に確乎たる地位を占めてきた。その間俳諧は連歌のかげにかくれてはいたが、全く顧みられなかったわけではない。早く二条良基の『菟玖波集』には俳諧の部立てがあり、室町末期の『守武千句』の跋文には、俳諧好きの連歌師たちの消息が生き生きと語られている。堂上公家たちの日記にも、連歌の余興として、くつろいだ一座のなぐさみとして、俳諧の試みられた様子が記録されている。

室町の末期はそういう情勢の中でも特筆すべき時代であった。言うまでもなく、『犬筑波集』『竹馬狂吟集』それに『守武千句』の出現である。前二者は聞書ききがき的性格が強く、そこには当時一般の俳諧の雰囲気が反映されているであらう。戦国の破壊的雰囲気を反映してか、豪放磊落時に猥雑に走って、一座の人々の哄笑の声が聞こえて来るが如くである。『守武千句』には何回もの推敲のあとが見られて完成への努力が著しく、また意識して千句を制作する必要上、全体を統一する法則、即ち式目が早くも問題にされている。一座の興に終始するものと、全体の整齊をめざすもの、この二つの行きかたがこの時代に認められるのである。

俳諧の数寄者達

守武にはなおいくつかの俳諧百韻があり、ややおかれて元理法師にも俳諧の百韻があるが、以後貞門の興隆するまでの数十年の間は、『犬筑波集』が様々に伝承増補された例にも窺われるように、犬筑波的な即興本位の付合が一般的だったのであらう。天正十九年六月二十六日、陽明殿下近衛信尹の屋敷で和漢連歌が催され、公卿・僧侶七人が出席した。さて会果てて俳諧があった。『鹿苑日録』の筆者はその時の様子を「爛酒排(俳諧)倍各々談笑」と書いている。連歌の余興に、日常談笑の間の即興に、俳諧はむしろ盛んに行なわれたのだが、その行なわれようはまたおよそ右の如きものであった。

こういう零田氣の中からやがて俳諧に強い関心を示す人々が現われる。それはおよそ慶長前後の事であろうか。

慶長元年大村由己が死んだ。彼は秀吉のお伽衆として軍記物・謡曲などに自在の筆を揮ったが、俳諧にも独吟百韻一卷を遺した。

慶長十七年正月吉日のこと、「我宿は富貴繁昌春の松

御」を発句とする「俳諧之連歌」一卷が興行された。名古屋水谷福祿

氏の蔵される懷紙で、脇句以下の連衆は、光解・常幸・家昌・正伊・秀祐・正長・光応・武慶・氏広・盛安・光嘉・正信・光林・嘉勝。その素姓を知り得ないが、どこかの大名とその家臣達ではなからうか。

家康の側室お万の方の兄であり、紀州徳川家の家老でもあった三浦為春は、和歌・連歌・狂歌等に遊んだ文雅の士であったが、俳諧にも関心が深く、慶長末年に『大俳』一卷及び『七十句付』一卷を自筆に遺した。『大俳』所収の作品は全体おだやかなものだが、中には、

しりにくひつき思ひはらさん

せめて君のゆぐのしらみと生ればや」

身なげてしぬと思ひ出にせん

君様の小便水のふちもがな」

さてもかゆしやさてもあつしや

にえ湯にてあらひにけりなかさふぐり

など、『犬筑波集』などと同傾向のものも見られる。

慶長五年関ヶ原の戦に敗戦亡命し、いつしか連歌・仮名草子・狂歌などに名をあらわした、美濃斎藤氏の一族斎藤徳元も、自筆の俳諧集『塵塚俳諧集』(寛永十一年成)に慶長末年以来の作品を書き留めている。彼はまた、「鮎なますあいより青き蓼酢哉」を発句とし

「魚鳥俳諧」と題する形式完備の百韻を独吟したが、それには三藐院近衛信尹が加點している。三藐院は慶長十九年に歿したから、それ以前の成立である。

伊勢は守武以来の伝統を継いで俳諧が盛んであった。その指導者杉木望一が、「ほこ長し天が下照る姫はじめ」以下の独吟千句を詠んだのは寛永初年以前のことであった。堺もまた俳諧の一中心であったが、同地の医師半井云也は、寛永二年俳諧狂歌をちりばめた紀行文『岩国下向之記』を作った。かつての連歌師の紀行文に於ける連歌の役割を俳諧が果たしているのである。望一・云也の活

動も寛永初年をかなりさかのぼるにちがいない。

貞徳は『久流留』の跋文に、自分の説く式目は私に定めたものでないとして、

丸は少年の時連歌の執筆して、玄旨法印・紹巴などの連歌過ぎて仕給ひし云捨の時、さし合の、さたを聞侍りしにより、その分に
さたしきたるたまものなれば、わたくしの儀なしと思へど……

と言っている。貞徳が連歌の執筆を勤めたのは、天正後期二十歳以前のことだという。その頃「云捨の時」即ち俳諧の場合に「さし合」が問題にされていたのである。

以上の如く、まとまった俳諧資料が数多くなっていること及びその内容によって、俳諧に対する姿勢が従来とはいくぶんちがってきている、ということが考えられる。貞徳にせよ、為春・徳元・望一・云也にせよ、そういう人たちはみな、従来よりは俳諧の方に
向きなおっている。そのことは、彼等をめぐる背景の中にそういう雰囲気があったことを示すわけで、その中から俳諧の好士・数寄者として認められるようになったのが彼等なのである。

しかし、俳諧に対する意識が高まったとはいえないものの、俳諧は文学の一ジャンルとして確立されていたわけではない。例えば、すでに説かれている如く、三浦為春の『犬吠』や徳元の『塵塚俳諧集』中の有馬入湯日発句には、連歌、師里村昌琢の奥書があることから知られる通り、俳諧は連歌から未分化の状態であったし、上記の人々がみなそうであったように、俳諧作者はそのまま連歌の作者でもあったのである。また、上記の数寄者たちは、後世の諸書に伝える如き貞徳を中心とする師弟関係に結ばれていたわけではない。むしろ、俳諧の同好者として気楽に俳諧を楽しみあっていたのである。

俳諧作者の誕生

寛永期になると、そこから一歩進んだ現象が現われてくる。寛永六年十一月、京都寺町の妙満寺で雪見の俳諧の会が催された。『貞徳永代記』にその会の模様を次の如く書いている。

真連歌の会の式法に毛頭たがはず。床に天神人丸をかけ、花瓶を立、文台をかまえ、式法の会席は始也。（中略）執筆は須賀庄三郎也。

このかたひじはった姿勢には、俳諧を連歌の余興・云捨とする姿勢からぬけ出し、正面から取り組もうとする人々の意気込みが感

じられる。それに、一座の人々も貞徳のほか、西武・親重・日如・道節・日能・令徳・宗畔と、文字通り貞門と称し得る人々であった。つまり、俳諧によって貞徳と師弟の關係に結ばれ、専ら俳諧を事とする人々のグループなのである。俳諧作者の誕生である。

彼等とはや連歌とは無縁の人々であつた。雪見の会の出席者の一人野々口親重（立圃）は『はなひ草』の序文でこういつてゐる。

道のちまたにても知人に行あひぬれば、多もんひきつくるひ、ひぢをいからかし、けふは連歌の月なみにてそこ／＼へまかる、なんどいふをうらやまして、道の達者にしたしみよりうかぶみ侍れば、からのやまとのその事このことをきてのたゞしきに、立入べくもあらず。こゝに連歌のたゞごとをはいかいといひて、あながちにふるごとの跡をもおはず、今やうのよしなしごとを口にまかせていひちらすあり。其たへなる所にいたりては輪扁が輪たるべけれど、いひやすきに心ひかれて、予が爲には孟母が三遷ともまげておもひなしぬ。

ここには、連歌とはつきり断絶した俳諧作者の誕生が語られている。前代の数寄者達が広く和歌・連歌等に遊び、その余技として俳諧を楽しんだのに比べれば、俳諧の作者層が質的に大きな変化を示しているのである。連歌と断絶した人々にとって、俳諧は今や彼等の全てであつた。当然彼等は俳諧に対して積極的であつた。寛永八年二月の頃、親重と重頼が師貞徳に俳諧の撰集を熱心にすすめたのもその一つのあらわれであつた。この撰集の編集過程において親重・重頼の間に不和を生じ、それが原因で二人は貞徳と疎遠になつた。結局、重頼の手により寛永十年正月刊行された『犬子集』である。

この撰集に題号を求められた貞徳は、俳諧に集と名付けるのは和歌・連歌に対してはばかりありとして犬子草という名を与えたが、重頼はあえて犬子集として刊行したのである。しかも、その初版本は堂々たる大本五冊、板下も大師流の立派なもので、全体和歌の撰集を念頭においたものとみられ、そこには、俳諧が和歌・連歌に匹敵し得るものなのだという編者の意識が看取される。そういう点にも新時代の作者達の姿勢が示されているのである。

かくして成つた『犬子集』は発句一六五四、付句千余、作者一七八人、この作者を地域的に見れば、伊勢山田百人、京都五十一人、堺十九人、江戸五人、大坂・因幡各一人となつてゐる。俳諧の伝統の古い伊勢山田と堺の多数が目立つが、入句数から言えば京都は断然他を圧している。その中でも貞徳は全体の一割に近い二百句を入集して居り、俳壇の中心人物と目されていた。幽斎をはじめとする当代一流の文化人に親しんだ広い教養と、すぐれた才能・指導力によるのであるが、しかし、『犬子集』の場合にそうであ

ったように、俳諧に対していくぶん消極的な面があった。直系の撰集『鷹筑波集』も門人西武の名で出している。彼が公然と公刊俳書に名を出すのは、寛永二十年の『新增犬筑波集』においてはじめてなのである。式目書の編集公刊の場合もそうなのだが、重頼・親重などはむしろ積極的であり、貞徳はそういう周囲の事情に促されて、やがて漸く積極的に身をのり出してくるのである。

太平の世の俳諧

俳諧に対する世人の関心が高まり、貞徳から独立した親重や重頼が独自に門戸を張りうる程に作者層が拡大されると、俳諧についてのいちおうの基準が求められるようになる。それに応えるものがいわゆる式目作法書である。

その最も早いものは親重の『はなひ草』で寛永十三年の奥書がある。次いで重頼の『毛吹草』には十五年の序文がある。徳元の『俳諧初学抄』は十八年に刊行された。総帥貞徳にも強い要望があったはずである。寛永二十年刊『あぶらかす』の巻末に、渋谷紀州から度々所望されていながたその大体を示すといつて、式目歌十首を出している（本文二二頁参照）。それは大体和漢連歌に準拠し、それをいくぶん緩和した形になっている。この十首だけでは、連歌に精通した作者はともかく、一般の作者には不便であったから、門弟西武は貞徳にその細目を問うて歴大な式目書『久流留』を編み慶安三年に刊行した。その翌年には貞徳自らの名で『俳諧御傘』を出し、これが貞門の準繩とされた。一方、貞徳は実作によって範を示すべく『新增犬筑波集』二冊を出した。上巻に当たる『あぶらかす』は『犬筑波集』の前句に自ら付句数句ずつを試みたもの、下巻に当たる『淀川』は『犬筑波集』の付合を批判し自ら第三

を付けたもので、それらによって当世風の俳諧の行き方を示したものである。これらにおいて貞徳が指摘したのは、俳諧には俳言すなわち和歌連歌に用いぬ漢語俗語などが必要であること、一句が独立していること、用附・同意・同字をさけるべきこと等である。

すでに言われる如く、貞徳は俳言という外面的規定によってのみ俳諧の本質を規定したわけではない。たとえ俳言はなくても付味に俳諧的要素があれば俳諧として認めていたのである。しかし、門人季吟が貞徳の言葉として「俳諧は即ち百韻ながら俳言にて賦する連歌なれば」（増山）^{（増山）}と言っているのが、俳言についての一般の受け取りかたであった。教養の乏しい一般作者にとっては、付味などよりははるかに理解し易い尺度であったろう。貞徳もその点を考慮してこれを利用したのである。俳言は俳諧性を機械的に外面から規定するといった面もあるが、連歌から独立して日も浅い俳諧が、自らの独自性を主張する明瞭にしてとり早い尺度であったし、また従来和歌・連歌の扱い得なかった世界を俳言という形でとりいれ、自らの世界を拡大するに有効であったろう。例えば

『あぶらかす』の素材を見ると、遊女・男色・破戒坊主・海賊・咳氣病・どじょう汁等々、その取材範囲は社会風俗の各方面にわたって変化に富んでいる。

連歌から独立しその世界を拡大した俳諧は、当時の人々にとつてまことに親しみ易い斬新なものであった。少しく時代はくだるが、延宝四年刊『言之羽織』に見える、

古屋根の板がへせしも仕舞らし 拙言

連歌はいづれにたりよつたり 未了

という付合は、その裏に俺たちの俳諧はもっと自由で面白いものだという得意さがこめられている。そういう意識は貞門初期の俳人たちにもあったにちがいない。

かくして、俳諧は斬新で面白いものとして世人に歓迎されることになった。しかし、太平の世にふさわしい文学としてその地位を確立するためには、また別の一面が考えられねばならなかった。『淀川』において貞徳は、

にがく敷もおかしかりけり

我おやの死る時にもへをこきて

という『犬筑波集』の付合を、道徳的見地から激しく非難している（本文二四四（九頁参照））。これを非文学的立場よりする保守的見解とばかりは言いきれない。連歌から独立して太平の世にふさわしい文学の一ジャンルとして俳諧がその地位を確立するためには、犬筑波的な行き方にある程度の修正が必要だったのである。また、式目書の一見煩瑣な形式主義に見える諸規定も、その規定を守りさえすればとにかくいちおうの俳諧ができる、という点で当時の一般作者にとつて有難いことであったろう。このようにみると、貞門の指導者達のとつた方法及び方針は、当時としてはやはり適切なものだったと言える。

かくして、寛永年中から正保慶安にかけて、俳諧作者層の拡大を背景に、作品が結集され、式目作法書によつて俳諧の理念が明確にされ、俳諧は文学の一ジャンルとしてその地位を確立したのである。一方、早く『犬子集』をめぐる重頼と親重の対立、正章の『俳諧百韵之抄』（寛永十（九年刊））に対する重頼の非難、重頼の『毛吹草』に対する正式・正章の論難など、俳人間に对立抗争があったが、全体的にみれば貞徳のもとにいちおうの統一が保たれていたのである。

貞門後期の俳壇

承応二年の貞徳の死は、時期的に俳諧の普及が一つの頂点に達していたこともあって、俳壇全体に大きな波紋を生じた。

中央京都では貞徳の後継者にふさわしい人物を得なかったため、各人が独立割拠して反撥抗争した。早く貞徳の門を去った重頼（維舟）・親重（立圃）はもとより、西武・正章（貞室）・令徳・季吟、それに新人梅盛などが、それぞれ勢力の拡張に腐心した。

正章が貞徳の後継者の地位を狙って貞室と改名し『貞徳終焉記』を著わし『玉海集』（明暦二）を編むなど宣伝につとめれば、ライバル西武は『沙金袋』（明暦三）を出して対抗する。貞室は『五条之百句』（寛文三）を出して重頼・立圃以下同門のたれかれを意地悪く評判する。一雪が『茶杓竹』（寛文三）を出して貞室の『正章千句』（慶安元）を攻撃すると、貞室側は『蠅打』（寛文四）でこれに応戦する。

はじめ貞室の門にあった季吟は、貞徳生前すでに『山の井』（正保五）『独琴』（慶安二）を刊行していたが、この期には和歌・古典研究・仮名草子の創作と多方面に精力的に活動し、俳諧ではまず『埋木』（明暦二）を完成し、以下『いなご』（明暦二）『祇園奉納俳諧発句合』（明暦二）『新統犬筑波集』（万治三）『増山の井』（寛文三）『俳諧両吟集』（寛文四）『季吟十会集』（寛文十二）と続々刊行している。

季吟と並ぶ新進俳人は、明暦二年に処女撰集『口真似草』（明暦二）を刊行した高瀬梅盛である。彼はひきつづいて『鸚鵡集』（明暦四年）『捨子集』（万治二）『木玉集』（寛文三）『早梅集』（寛文三）『落穂集』（寛文四）『細少石』（寛文八）『便船集』（寛文九）『山下水』（寛文十二）と、いずれも大部の俳書を相次いで刊行している。まことに精力的な活動ぶりである。

一方古老の重頼は『懐子』（万治三）『佐夜中山集』（寛文四）『俳諧時勢粧』（寛文十）と、いずれも大部の問題作を自費出版し、立圃も注目すべき俳論書『河舟徳万歳』（承応二）俳文集的要素をもつ自選発句集『そらつづて』（寛文三）その他を出した。

地方の俳壇

地方の俳壇にもわかに活潑化した。明暦二年の『玉海集』には、西は薩摩から東は出羽に至る三十七か国六五八人の作者が入集した。これを二十三年前の『犬子集』の五か国一七八人に比べると、その普及の程が察せられる。これら諸国のうち、特に注目すべき

は新興都市江戸と大坂である。

江戸では、寛永以来徳元・玄札・未得・卜養・加友などが草分け的存在として活躍していたが、早く歿した徳元以外は相変らずその地位を保っていた。一方、明暦頃から一世代若い新人達が擡頭してくる。即ち蝶々子・春清であり、ややおくれて調和・立志・兼豊・定時などである。蝶々子と春清は明暦の大火をはさんで撰集の先陣争いを演じ、蝶々子の『物志草』(明暦三)、『思出草』(寛文元年刊)、春清の『鹿驚集』(寛文二)が出版された。加友は万治三年『俳諧画空言』を出したが、これは江戸通油町の本問屋から出版されており、江戸書肆出版俳書の嚆矢であった。玄札の第一撰集の計画は途中で立消えになったが、『十種千句』(寛文八)を出版し、未得の『一本草』(寛文九)も歿後に息子の未琢の手によって公刊された。

重頼・立圃・貞室・季吟・梅盛・一雪などの中央俳人も、この新興都市にはそれぞれ関心を示したが、江戸俳人達はこれらと時には鋭く反発し、時には協調しながら、俳諧の一中心として成長して行くのである。

一方、江戸の俳人達は、その周囲の後進地に対して指導的立場にたつようになる。例えば、未得の活動は陸奥・出羽・加賀から伊豆に及び、甲斐・下野・遠江・下総・三河などにも顯著である。奥州岩城城主内藤風虎も万治二年以前に未得・玄札の批評を乞うている。出羽俳人中、未切・未求・未存等は未得の一字に因む俳号であらうし、『奥の細道』に「最上川のらんと、大石田と云所に日和を待。爰に古き俳諧の種こぼれて……」という、その種をまいた一人は未得ではなかったか。伊豆の俳諧の草分け、古奈の石橋喜得は未得から一字を得て号とし、『青柿千句』を独吟する程であった。かかる僻遠の地に対する指導的役割りを果たすことは、江戸の地理的条件から考えて当然のことではあるが、地方における初期俳諧普及の一ケースとして注目すべきものである。

新興商業都市として経済的実力を蓄えてきた大坂もまた注目すべきものがある。『犬子集』に休甫一人しか入集しなかった大坂俳人は、明暦二年はじめて自らの撰集をもった。蔭山休安編『夢見草』五冊がそれである。当時の慣習でもあった貞徳など中央俳壇の大立物の名の見えぬまことに新鮮な顔ぶれの俳書である。後の談林の総帥西山宗因が一幽の名ではじめて俳書に登場するのも象徴的である。以後『雪千句』(寛文五)、『遠近集』(寛文六)、『落花集』(寛文十)とつづくのである。

江戸・大坂以外にも、古い伝統を有し、大坂と密接な関係のある堺、熱田神宮の法楽俳諧を中心に寛永以来盛んであった名古屋、それに伊勢など注目すべきところである。

俳書の増加と多様化

さて、俳壇が活潑化してくると、必然的に俳書の刊行は増加する。明暦二年には一挙に十余部が刊行されているが、当時としては破天荒のことであった。一雪は自著『晴小袖』の序に、万治初年までに十五六部にすぎなかった俳書が今寛文十二年には百部に及んだと、俳書刊行の盛況を述べている。一貞の『貞徳俳諧記』(寛文三)(年刊か)には九十部の俳書名をあげている。延宝四年の『渡奉公』には当時までの俳書をほぼ年代順に配列しているが、寛文末年までの分は約二百二十部を数える。当時の俳書には大部の物が多いことを考えると、これはかなりの量である。

数がふえただけでなく、その内容がバラエティに富んだものになってきた。

式目作法書は前代の諸書が改訂・再板を重ねる一方、新人たちによって新著が次々に公刊される。『鉋屑』(万治二)(年刊)の著者胤及は季吟の、『こまざらひ』(万治三)(年序)の著者常辰は立圃の、『初元結』(寛文二)(年刊)の著者は貞室の、『俳諧小式』(寛文二)(年序跋)の著者元隣は季吟の、『俳集良材』(寛文三)(年刊)の著者政由は西武の、それぞれ門人である。『鉋屑』は全七冊のうちはじめの五冊は発句付句集、おわりの二冊が付合作法の実例解説となっている。これは俳諧を楽しもうとする初心者にとってまことに便利な魅力のある編集であった。同様な傾向は『和歌竹』(万治三)(年刊)、『身楽千句』(寛文二)(年序)、『破枕集』(寛文三)(年序)、『都草』(寛文五)(年序)、『洗濯碓』(寛文六)(年序)などにも見られるのであって、当時の一般俳人の希望と、それに応える指導者の配慮がうかがえる。

作品集も発句集・連句集・句合・歳旦帳など多種多彩となった。句合は季吟判『祇園奉納俳諧発句合』を以て嚆矢とするが、これは和歌に通じた季吟が歌合にヒントを得た創意であろう。立圃や元恕にも寛文中すでに句合の書がある。歳旦帳は各派ごとに編集出版され、それはそのまま自派の勢力の誇示宣伝となっている。

この期には地域的に又は俳系によって俳壇が細分化されたから、その全体を網羅する大撰集はあまり編まれなかった。しかし、一般読者からは一派に偏しない、俳壇全体を鳥瞰するような内容の俳書も要望されたにちがいない。三余編『百人一句』(万治三)は有名俳人百人選ともいべきもので、右の期待に応えるものであった。書肆寺田重徳の編んだ『俳諧独吟集』(寛文六)(年刊)にもそういう意味があったろう。これらは大いに歓迎されてそれぞれに続篇を出している。また複雑な派閥関係も初心者には興味があつかふ必要なものであった。『源氏鬢鏡』(万治三)(年刊)巻末に付せられた俳人系図はこの種の最初のものであり、つづいて『貞徳俳諧記』(寛文三)(年刊)

『俳諧作者名寄』(寛文末(年成か))がある。

派閥の対立抗争が時には論難応酬にまで発展したことは前述の通りであり、ほかにも『崑山集』に対する『馬鹿集』(明暦二)がある。『五条之百句』(寛文三(年序))などはこの論戦とも関係はあるが、同門俳人を批評した文学的人物評論ともなっている。

俳論俳諧観は俳書の序跋類にもしばしば吐露されており、あるいは式目作法書に見解が示され、盤斎の『俳諧談』(寛文五(年刊))と銘打った書物さえ刊行されている。

俳書そのものにも工夫がこらされるようになった。絵入り俳書の嚆矢は季吟の『いなご』(明暦二)であろう。『百人一句』や『俳諧画空言』も絵入りである。『源氏鬢鏡』は源氏物語の通俗解説書で、絵入り発句入りで源氏物語五十四帖の梗概を平易に述べている。俳諧が古典啓蒙に用いられた好例で、これが巷間いかに歓迎されたかは、数度の再版・改題本の存在によって知ることができる。『吉野山独案内』(寛文十(年刊))は吉野山の名所を和歌・連歌・狂歌・俳諧入りで説明した絵入り娯楽地誌であるが、俳諧が主体となっている。中川喜雲の地誌『京童』(明暦四(年刊))『京童跡追』(寛文七(年刊))にも俳諧発句が添えてある。

俳風の多様化

俳壇が全国的に活潑化し、俳書の刊行も多種多様になってきた。その間約二十年。一方に保守的な面を強く残しながらも、一部には俳諧観の深化が見られ俳風が多様化してくる。

重頼は『毛吹草』で俳言の範囲を著しく拡大し、そういう意味で進歩的な俳諧観を示したのであるが、この期になると一層その方向を徹底した。俳諧の取材範囲を諷舞・小歌・幸若・狂言・万歳楽・世話に至るまで拡大し、更にその素材の如何を問わず、表現の仕方・物の見方によって俳諧ともなり連歌ともなるといふ「心の俳諧」の立場にまで至っている。立圃にも同様の傾向が見られる。

後の談林の総帥西山宗因の『宗因千句』(寛文十(三年刊))は万治以前から寛文年中に成立した百韻十巻をとりあつめたものであった。その談林の特徴の一つである謡曲調の俳諧は、重頼の『佐夜中山集』(寛文四(年奥書))に大いに鼓吹されているところであった。

承応から延宝にかけて主として江戸で流行した奴俳諧も注目すべきものである。奴とは当時市中を闊歩した男伊達をいい、彼等の特殊な武張った用語を奴詞といい、その奴詞を以て賦した連句を奴俳諧というのである。『清十郎追善やつこはいかい』(寛文七(年刊))はその代表的なものである。一般に用語の奇抜と取材の自由は驚くべきもので、その点談林俳諧に一脈相通するものがある。かの芭蕉

もこの奴婢諧と同傾向の『貝おほひ』(寛文十一年刊)を処女撰集として俳壇に登場し、やがて蕉風に開眼して行つたのだが、貞門の奴婢諧の多くは俳壇に傍観的な人たちの手すさびに成るもので、新風の展開には直接の寄与をなし得なかつた。

後世の民衆文芸たる雑俳の萌芽が早くもこの時期に認められる。元禄九年刊『高天鷲』の序文に次の如くある。

去万治年中に泉州界に池島氏成之といふ好士有りし。其比河州小山村に日暮シ氏とやらん重興と名乗たる能書有りし。此人成之の前句を取初めて六句付といふ事を始められたり。四季の句に恋にても名所の句にても加へて六句に十銅づゝ集メ褒美といふ事もなく巻勝にして河州の誹友是を楽しめり。是ぞ此道の最初なる。

連歌から俳諧が独立し、その俳諧から雑俳が派生するという文学史の展開の一コマが、すでにここには見られるのである。

かくして、承応から寛文末年に至る約二十年間は、あらゆる面で多様化の時代であり、一面に強い保守性を残しながらも、一面では以後の俳諧の展開の可能性の萌芽を見せ始めた時代といふことができるのである。

延宝期の貞門

延宝期は談林の時代である。談林の擡頭により、従来の論争などとは異質の保守と革新という対立が生じ、ここにいくつかの激しい論難応酬が交された。そこには両者の文学的主張もあるにはあるが、職業的俳人の勢力争いにより重点があつたのである。そして、この論争にみるかぎり、貞門は甚だ劣勢であり談林は圧倒的に優勢であつた。貞門側でさえ、

宗因くとして、京大坂江戸に渡り、今既に日本国に流布し、大形此風にかたぶきぬ。それ故古風をあふぐ俳諧士、当風に吹せめられて、片角に目ばかりうごくやうに見え侍る。さればこの比何者か仕たりけん、当世のすたり物、隠元(註)の墨蹟、貞徳流の俳諧、鎌倉団右衛門とかけり。(俳諧破邪顕正)

と言っている。だが、貞徳流を標榜する俳人たちは江戸時代末期まで根強く残存したし、『綾錦』(享保十一年序)『俳諧家譜』(宝暦元年刊)などにも、貞門系の宗匠は、蕉門は勿論、談林をさえ圧しているのである。延宝期の江戸俳壇で最大の勢力を誇つた貞門系の調和にしても、その作風は純粹に貞門とは言えないが、かといってまったく談林に化したのでもなかつた。

華々しかった談林俳諧も延宝末年には早くも行きづまりを見せてくる。そこから芭蕉に代表される一群の人々の如く純粹の詩精神を追求する人々が現われるのであるが、貞談両派の末流の多くは雑俳へと転じて行くのである。

凡 例

一、本篇には貞門前史及び貞門時代の作品主体の俳書を、成立又は刊行順に配列収録した。書目の選定については次の諸点に留意した。すなわち、右時代の俳諧史の大体を把握し得ること、各種の俳書を収めること、未翻刻書をなるべく採ること、伝本がすくなく披見の機会の乏しいものを収めること、新たに参考すべき諸本に気付いたものを収めることなどである。以上によって例えば、日本俳書大系と併用すれば、貞門のいわゆる四大俳書を瞥見しうるようにした。しかしながら、紙数の都合その他のため、当然収むべくして割愛したのも多かった。

二、各書目の冒頭に解題と、必要な場合には例言を掲げた。

三、翻刻についての方針

1、底本を忠実に翻刻することを主旨とした。底本・校合本は各書目の解題又は例言に明記した。

2、本文には新たに濁点をつけた。底本の濁点は(濁ママ)と傍記して区別したが、底本に濁点の多い場合はかわりに・印をつけ、各書目の例言にことわった。

3、読みがな・漢字ルビを新たにつけた。底本の読みがなはハ V印をつけて区別したが、底本に読みがなが多い場合はハ V印をつけないこともあり、それは各書目の例言にことわった。

4、底本に送りがない場合は読みがなをつけて補った。

5、明らかに底本の誤字と認められるものはその右側に()を付けて正字を示した。

6、使用漢字は原則として現行漢字に改めた。ただし、迂遷・玠珍・涼涼・凄違・灵霊・救数・船船・逃逃・杓杓・耻恥・鼓鼓・躰体・鸞燕・菴庵・貞貌・鴈雁・脉脉・帛紙・弼州・叟事・役役・艸草・穠(秋)・裝裝・酌酌・枕樺・咄嘩・寂最・恠松・艱養・舛秋・灯燈などはそのままだにして、原本の面影を残すことにした。